
平成24年度 フェスティバル調査研究
報告書

平成25年7月
アートカウンシル東京 アーツアカデミー

目次

	(ページ)
序-1:調査研究の目的	1
序-2:調査研究の内容と構成	1
I:東京都の文化事業の方針とフェスティバル／トーキョーの変遷	4
II:主要フェスティバルの概要と評価軸の抽出	6
III:フェスティバル分析の考え方と指標	8
参考:今後の調査の考え方	11

別添資料

資料1:フェスティバル／トーキョーの変遷

資料2:東京都で実施されている主要フェスティバルの概要

資料3:その他の地域で実施されている主要フェスティバルの概要

序-1. 調査研究の目的

本調査研究は、今後の東京都にふさわしいフェスティバルの在り方を検討することを目的に、フェスティバル事業の評価の在り方、手法を試行するものである。

2000年以降、ビエンナーレやトリエンナーレ形式の国際美術展が国内で増加の傾向にある。横浜トリエンナーレ(2001年～)、大地の芸術祭越後妻有トリエンナーレ(2000年～)、あいちトリエンナーレ(2010年～)、瀬戸内国際芸術フェスティバル(2010年～)などは、都市の活性化、地域振興、国際都市としてのプレゼンスの向上、また、創造都市を形成するための戦略や観光資源としても注目されている。東京都でも、アジア舞台芸術祭(2002年～)、東京・春・音楽祭(2005年～)、恵比寿映像祭(2008年～)、フェスティバル／トーキョー(2009年～)、六本木アートナイト(2009年～)などが行われている。しかし、一括りにフェスティバルといっても、設立背景や目的、事業の構成や内容、芸術分野など、多様である。

また、文化芸術への予算が増加される一方で、その予算が適切に執行されているのかを国民へ説明責任する必要性が高まっている。文化庁による「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第3次基本方針)」では、国民への説明責任に資するために、PDCA(計画、実行、検証、改善)サイクルを確立する必要性が強調され、そのために有効な評価手法の確立に努めることとし、2011年度から文化政策の評価手法に関する調査研究が進められている。

同様に、東京都でも、今後のフェスティバル事業を推進する上で、その事業の意味、効果、公益性などについての、評価指標や評価基準の設定が必要になってきている。

本調査研究では、東京都にとって、理想的なフェスティバルに求められるものは何かを検討することを目的に、東京都の政策や東京文化発信プロジェクトの評価の考え方、また、今後のフェスティバルを適切に評価するために、フェスティバルを特徴づける要素や評価の視点を検討した。

序-2. 調査研究の内容と構成

フェスティバルは都市の活性化や地域振興を促す創造・発信力の高い事業として注目されている。一方で、国内ではフェスティバルの評価に関する調査研究の事例は少ない。また、海外ではフェスティバルの評価に関する調査研究の事例があるが、国や地域の持つ文化的背景や社会的背景が異なるため、それらの調査結果が国内のフェスティバルの評価に対応できるとは限らない。そこで、本調査研究では、以下のような手順で、東京都の政策や今までフェスティバル事業を実施してきた東京文化発信プロジェクトの評価の考え方を分析した上で、主要フェスティバルの現状を表すデータを収集し、分析することにした。

【1】調査内容

本調査研究では、理想的なフェスティバルに求められるものは何かを検討することを目的に、フェスティバル／トーキョーをモデルケースとし、東京都の政策、東京文化発信プロジェクトのこれまでの事業方針と評価、フェスティバル／トーキョーに関する既存情報・データの収集を行い、従来のフェスティバルに対する評価の考え方を指標として抽出した。また、フェスティバル／トーキョーを含む東京都で開催されている14のフェスティバルおよび東京都以外で実施されている4つの主要なフェスティバルに関する既存情報・データの収集を行い、「評価」することを前提として、フェスティバルを特徴づける要素を抽出した。

また、抽出された3つの指標から主要フェスティバルのマッピングを行い、3つの指標とフェスティバルを特徴づける要素の関連性を考察した。

調査項目を整理すると以下のとおり。

- 東京都の政策目標
- 東京文化発信プロジェクトの事業のねらいと評価
- フェスティバル／トーキョーの事業概要、プログラム、広報・PR
- 主要フェスティバルの事業概要

主要フェスティバルとしては、以下の代表的なフェスティバルを対象とした。

東京都で実施されているフェスティバル

- 都民芸術フェスティバル(全分野)
- アジア舞台芸術祭(舞台芸術)
- 六本木アートナイト(美術)
- 東京アートミーティング(美術)
- 文化庁メディア芸術祭(メディア・映像)
- 恵比寿映像祭(映像)
- 東京フィルメックス(映画)
- 東京国際映画祭(映画)
- イメージフォーラムフェスティバル(映画)
- Music Weeks in Tokyo(音楽)
- ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン(音楽)
- 東京・春・音楽祭(音楽)
- 多摩川流域郷土芸能フェスティバル(民俗芸能)
- 三茶de大道芸(大道芸)

東京都以外の地域で実施されているフェスティバル

- 京都国際舞台芸術祭(KYOTO EXPERIMENT)(舞台芸術)
- 国際舞台芸術ミーティング(TPAM)(舞台芸術)
- あいちトリエンナーレ(美術、舞台芸術)
- ヨコハマトリエンナーレ(美術)

【2】研修会での検討経過

第1回	2013年1月9日	研修会:調査方針の議論
第2回	2013年1月16日	研修会:調査概要の設定
第3回	2013年1月23日	研修会:調査対象の検討及び調査手法の構築
第4回	2013年2月7日	研修会:データ収集に関する報告および調査項目の検討
第5回	2013年2月20日	研修会:データ収集に関する報告および調査項目の検討
第6回	2013年3月6日	研修会:分析
第7回	2013年3月19日	研修会:分析
第8回	2013年3月20日	研修会:分析

【3】調査体制

本調査研究は、平成24年度アーツアカデミー事業の以下の7名の調査員で実施した。

[調査]

- 稲村 太郎 アーツアカデミー調査員
- 碓井 千鶴 アーツアカデミー調査員
- 小山 文加 アーツアカデミー調査員
- 樺澤 良 アーツアカデミー調査員
- 戸館 正史 アーツアカデミー調査員
- 野村 政之 アーツアカデミー調査員
- 林 立騎 アーツアカデミー調査員（五十音順）

[オブザーバー]

- 石綿 祐子 アーツカウンシル東京 プログラムディレクター
- 佐野 晶子 アーツカウンシル東京 プログラムオフィサー

I：東京都の文化事業の方針とフェスティバル／トーキョーの変遷

東京都は2006年に、都知事の附属機関として東京芸術文化評議会を設置し、その提言を受けて「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けた「東京文化発信プロジェクト」を2007年にスタートし、フェスティバルを含む4つの事業を以下のように展開してきた。

- Festival: 世界的な国際フェスティバルを開催する事業
- Kids/Youth: 子どもや青少年を対象に多様な創造活動を体験する機会を提供する事業
- Artpoint: アーティストと市民が協働した地域の文化拠点を形成する事業
- Networking: 国際ネットワークを強化する事業

ここでは、フェスティバル／トーキョーが開始された2009年から2012年までの4年間の東京都の政策に関する資料、東京文化発信プロジェクト事業に関する資料、フェスティバル／トーキョーに関する資料をインターネット等で収集した。

東京都については政策目標や方向性を、東京文化発信プロジェクトについては、事業のねらいとフェスティバル／トーキョーに関する事業評価(結果、成果、課題、今後の方向性等)を、また、フェスティバル／トーキョーについては、開催概要、予算規模、各年度のプログラムのテーマや実績を整理した(資料1参照)。

1) 東京都の政策目標

2006年に東京都が策定した長期計画「10年後の東京」では、都市の魅力や産業力で東京のプレゼンスを確立することを目標とし、東京の新たな文化を創造・発信し、国際交流を展開することを掲げている。また、2011年12月に策定された「2020年の東京～大震災を乗り越え、日本の再生を牽引する～」では、産業力と都市の魅力を高め、東京を新たな成長軌道に乗せることを目標とし、東京の多彩な魅力を演出・発信し、国内外から来訪者を呼び込むことを掲げている。

2006年と2011年に策定された政策では、文化芸術を「都市の魅力」を向上させる文化資源と捉えていることが共通しているが、2011年に策定された政策では、さらに東京芸術文化評議会の提言「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、創造・発信だけでなく、東京の文化の潜在力を活用するための新しい仕組みづくり(アーツカウンシルの設置等)や、産業や観光分野との連携などの必要性が強調されている。

2) 東京文化発信プロジェクト

東京文化発信プロジェクトは「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けた様々な事業を展開しており、文化の創造・発信、子どもや青少年を対象とする育成、多様な地域の文化拠点の形成を軸に、2011年以降は、国際的な創造・交流拠点を形成するための具体的な方策として、国際ネットワークの強化を行っている。

また、東京文化発信プロジェクトの資料によると、フェスティバル／トーキョーの事業のねらいを「舞台芸術の発信、裾野の拡大」(2009年度)、「創造と発信、およびアジアを代表する国際舞台フェスティバルになること」(2010年度)、「国際的な創造・交流・発信の基盤の形成」(2011年度)と位置づけている。

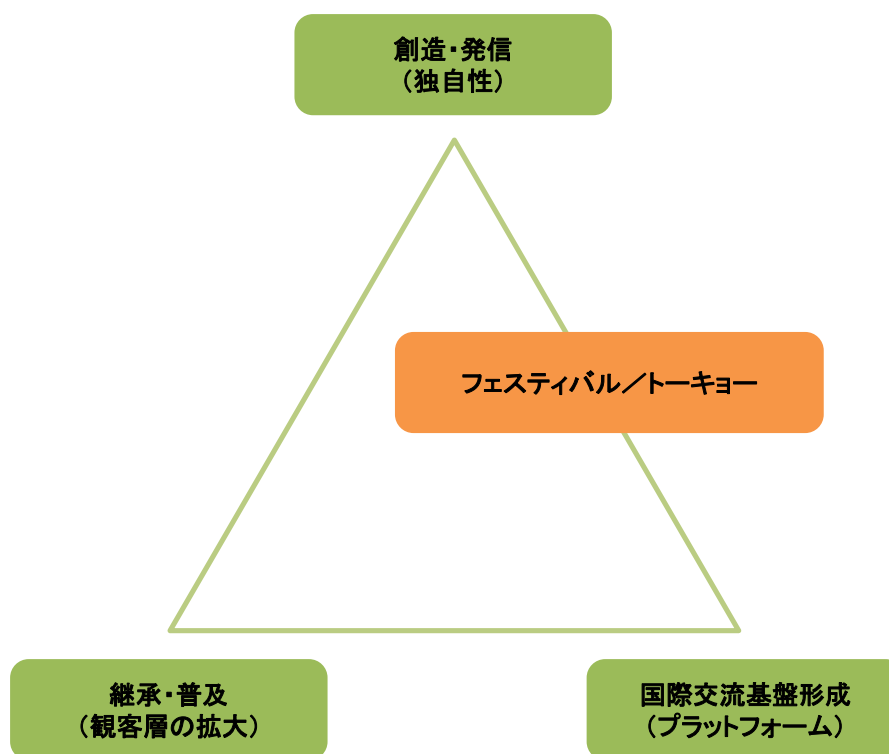
東京文化発信プロジェクトの事業評価では、フェスティバル／トーキョーを国際的なフェスティバルとして高く評価している。特に、独自性の高さと、創造発信のプラットフォームとしての機能は評価されている。フェスティバル／トーキョーが国際的な発信力を認められている一方で、観客層の拡大、普及が継続して課題に挙げられている。

3) 指標の整理

東京都の政策目標からは、「創造・発信」「国際交流」を、東京文化発信プロジェクトの事業のねらいや事業評価からは「新たな文化の創造・発信」「国際的な創造・交流拠点」「独自性」「プラットフォーム」を指標として抽出することができ、また、課題である観客層の拡大等から、「普及」を評価の指標として抽出することができる。

それらを集約し、東京都のフェスティバルの評価の考え方とフェスティバル／トーキョーの位置づけを「創造・発信(独自性)」「国際交流基盤(プラットフォーム)」「普及(観客層の拡大)」の3つの指標を軸に整理してみると以下の通りになる。

図表1 東京都の文化事業の指標とフェスティバル／トーキョーの位置づけ



Ⅱ：主要フェスティバルの概要と評価軸の抽出

主要フェスティバルについては、フェスティバルを特徴づける構成要素を分析するため、フェスティバル／トーキョー、東京都内で実施されている主要なフェスティバル14件、都外の地域で行われている主要なフェスティバル4件について情報収集・分析を行った。

1)フェスティバル／トーキョー12のプログラムの概要と評価

本調査の主要な対象であるフェスティバル／トーキョー12については、アーツアカデミーで調査を行った経緯もあり、主催プログラム、公募プログラム、関連プログラムといった詳細のプログラムの内容と広報・PRについても情報収集を行い、それらを以下の点から整理した。

- 目的・役割
- 観客へのアピール要素
- アーティストへのアピール要素
- 国内へのアピール要素
- 海外へのアピール要素
- 若手人材(アーティストおよびアーツ・マネジャー等)へのアピール要素
- 評価(成果、課題等)

その結果、フェスティバル／トーキョーからは約30のキーワードを抽出することができ、それらのキーワードを二項対立で再考し、以下のように整理した。

図表2 フェスティバル／トーキョー12から見えたキーワード

アジア／欧米、アジア／グローバル、アナログ的／デジタル的、横断的／ジャンル限定、開放性／閉鎖性、価値創造的／価値共有的、芸術性／社会性、芸術性／大衆性、言語／身体、現代的テーマ／歴史的テーマ、コアなファン／マス、国内性／国際性、コミュニケーション／ディスコミュニケーション、実験性／大衆性、社会性／娯楽性、ジャンル横断的／ジャンルの、ジャンル横断／ジャンル内、将来性／硬直性、人材育成／成果発表、先鋭性／一般性、先駆性／一般性、双方向的／一方向的、他者性／自己同一性、地域性(東京性)／広域性、ドメスティック／インターナショナル、ネットユーザー／非ネットユーザー／幅広い層、発展的／持続的、普及／研究、問題提起／作品鑑賞、若手／ベテラン、若手作家／ベテラン作家(年代)、総合的情報・プラットフォーム・アーカイブ/具体的情報・理解を深める、等

出典:フェスティバル／トーキョーの資料を参照し、アーツアカデミーが作成

なお、これらのキーワードはフェスティバルの内在的な価値を捉えるものであるが、その価値の影響力を表すものではない。たとえば「実験性／大衆性」という評価の視点は、どちらかによっていすることでフェスティバルの特徴を表すが、結果的に、観客、市民や地域に与えた影響力を測定するには、評価基準として、その実験性/大衆性の程度を測定・判断する基準を設定する必要がある。

2) 東京都とその他の地域で実施されている主要フェスティバルの概要

フェスティバル／トーキョー以外の東京都内外で実際されているフェスティバルについては、事業の概要を中心に分析を行い、評価の視点として考えられる要素を、以下の点から抽出した(資料2、資料3参照)。

- 芸術性
- 観客の参加
- 国内への影響力
- 海外への影響力
- その他

その結果、主要なフェスティバルからは約80のキーワードを抽出することができ、それらのキーワードに関連した二項対立、以下のように整理した。これらはフェスティバル／トーキョー12の調査結果と同様に、主にフェスティバルの内在的な価値を捉えるものである。

図表3 主要フェスティバルから見たキーワード

先鋭性・実験性／メジャー、若手育成あり／なし、祝祭性の高さ／なし、団体間の交流あり／なし、アーカイブWeb上公開／アーカイブWeb上非公開、アジア／欧米、アマチュアとの連携あり／連携なし、エリア集中／地域拡散、エリア密着／グローバル(マーケット)、横断的／分野限定、海外発信性、キュレーション／顕彰・公募、行政／民間、グローバル／アジア、コアな層／幅広い層、国際／国内、国内巡回映画祭／国際映画祭、コラボレーション、作品／環境、市民／アーティスト、ジャンル複合的／単一ジャンル、ジャンル横断／一貫したセレクション、将来性／硬直性、制作者／アーティスト、大衆性／芸術性、多様性／特化性、地域／広域、地域性(東京性)／広域性、地域の祭／国際映画祭、ディレクターあり／ディレクターなし、テーマでのキュレーション／顕彰・公募、テーマ性あり／テーマ性なし、同時代性／歴史性、ドメスティック／グローバル(マーケット)、ネットユーザー／非ネットユーザー／幅広い層、ネットワーク／そのほか、バイリンガル／日本語のみ、バイリンガルの公式サイト／国内向け公式サイト、幅広い観客層／グローバル(マーケット)・プレビュー、フェスティバルのための芸術団体／常設の芸術団体、プログラミングディレクター制／選考委員制(複数のプログラミング)、プロデューサーあり／プロデューサーなし、ボランティアスタッフ／そのほか、開催都市固定／開催都市巡回、革新性／伝統、革新的なコンセプト／王道的なコンセプト、鑑賞／参加、芸術監督あり／芸術監督なし、芸術性／商業性・ビジネス、芸術性／大衆性、現代アート／伝統芸能、公的助成／民間助成、公募枠あり／公募枠なし、行政／民間、国際／国内、国際フェスティバルの日本版／日本独自のフェスティバル、国際共同制作／単独で制作、国内／アジア・海外、国内アーティスト／海外アーティスト、参加オーディションあり／参加オーディションなし、子ども育成プログラムの充実／特定の年齢層の参加、時季との関連強い／弱い、自治体主催／民間主催、社会性重視／エンタテインメント性重視、新進／大物・古典、人材発掘／実績ある団体を支援、先鋭性・実験性／メジャー、専門の劇場・ホール／多様な施設の活用、専門家育成／観客とのコミュニケーション、専門的なスタッフ／ボランティアの活用、創造・発信／保存・普及、総合アドバイザー／選考委員制、他のフェスティバルとの連携あり／連携なし、多様性・異なるジャンル・新しいアート／一貫したセレクション、多様性／特化性、地域／広域、地域密着／グローバル(マーケット)、伝統あるフェスティバル／革新性のあるフェスティバル、都市型／郊外型、特定の地域からの参加アーティスト／多様な地域からの参加アーティスト、特定の地域の団体／多様な地域の団体、日本語サイト／多言語サイト、日本独自の文化／世界諸地域の民俗芸能、年度により多彩なアーティスト／継続的参加のアーティスト、幅広い音楽ジャンル／特定の音楽ジャンル、幅広い層／コアな人々の情報交換の場、明確なコンセプト／多目的、有料／無料

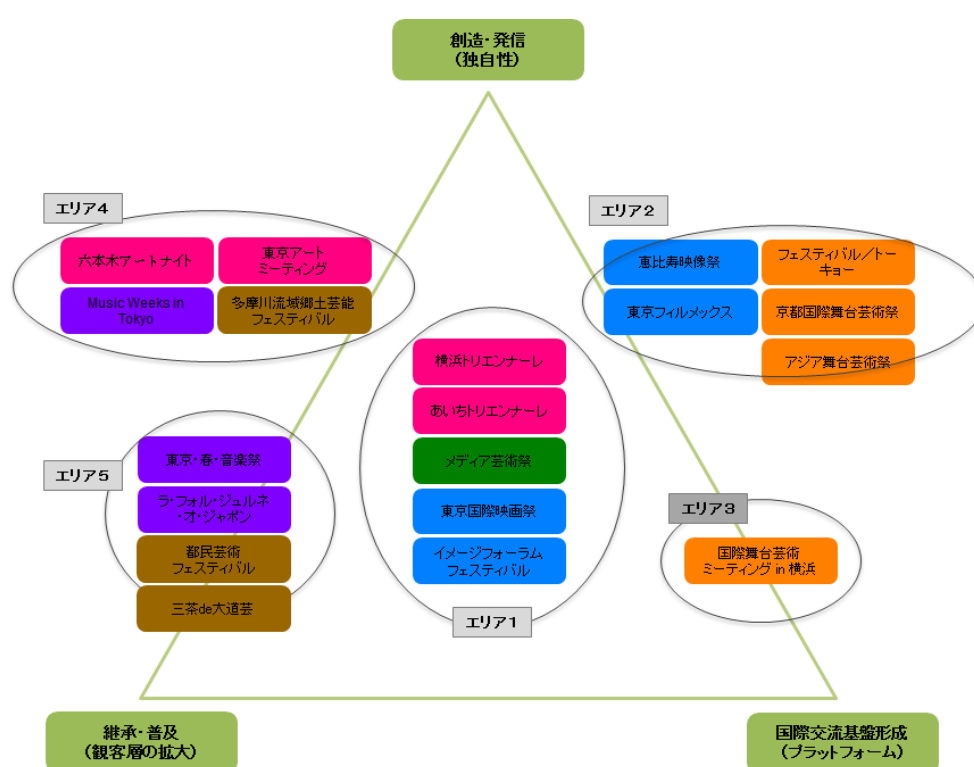
出典:各フェスティバル事業の資料を参照し、アーツアカデミーが作成

Ⅲ：フェスティバル分析の考え方と指標

1) 分析1: 3つの指標からみるフェスティバルの特徴(東京都の文化事業方針をベースとして)

Iにおいて抽出した「創造・発信(独自性)」「国際交流基盤形成(プラットフォーム)」「普及」をベースに、フェスティバル／トーキョーを含む主要フェスティバルの事業の目的や概要から、マッピングを行った。なお、以下の図表では、「普及」に関して、他の芸術分野を考慮して「継承・普及(観客層の拡大)」としている。

図表4 3つの指標と主要フェスティバルの位置づけ



* 芸術分野別に色分けした。

エリア1: 「創造・発信」「国際交流基盤形成」「継承・普及」の3つの指標をバランス良く満たすフェスティバルが該当し、横浜トリエンナーレ、あいちトリエンナーレ、東京国際映画祭、イメージフォーラムフェスティバル、文化庁メディア芸術祭などが位置づけられる。このエリアの特徴は事業規模が大きく、より広い観客を対象とするフェスティバルとなっている。

エリア2: 「創造・発信」「国際交流基盤形成」を中核にするフェスティバルが該当し、フェスティバル／トーキョー、アジア舞台芸術祭、京都国際舞台芸術祭、恵比寿映像祭、東京フィルメックスなどが位置づけられる。このエリアの特徴は、先鋭的な表現を取り上げ、国内のアーティストや作品だけでなく、海外からアーティストや作品を招聘して国際交流の場を形成するフェスティバルがめだつ。

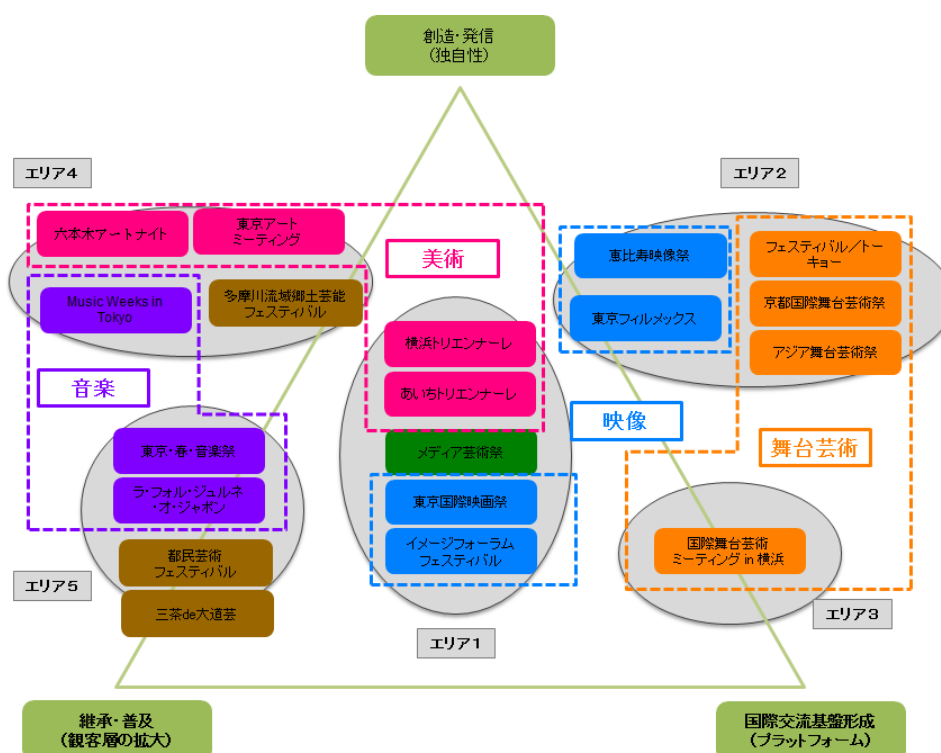
エリア3: 「国際交流基盤形成」を事業の核とするフェスティバルが該当し、国際舞台芸術ミーティングが位置づけられる。このエリアの特徴は、国際交流のプラットフォームを構築することに特化していることである。

エリア4:「創造・発信」「継承・普及」を中核にするフェスティバルが該当し、六本木アートナイト、東京アートミーティング、Music Weeks in Tokyo、多摩川流域郷土芸能フェスティバルが位置づけられる。このエリアの特徴は、国内のアーティストや作品を中心に創造性や発信性が高く、より広い観客を対象とするフェスティバルが目立つ。

エリア5:「継承・普及」を事業の核とするフェスティバルが該当し、東京・春・音楽祭、ラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭、都民芸術フェスティバル、三茶de大道芸を位置づけた。このエリアの特徴は、先鋭的な表現より一般性や継承を重視する傾向にあり、また、より広い観客を対象とするフェスティバルとなっている。

上記のエリアに該当するフェスティバルを芸術分野別に比較検討した場合、美術のフェスティバルは、エリア1(「創造・発信」「国際交流基盤形成」「継承・普及」とエリア4(「創造・発信」「継承・普及」)に位置し、基本的にはバランスが良い。音楽のフェスティバルは、エリア4(「創造・発信」「継承・普及」)とエリア5(「継承・普及」)に位置し、「継承・普及」の傾向が強い。舞台芸術のフェスティバルは、エリア2(「創造・発信」「国際交流基盤形成」)とエリア3(「国際交流基盤形成」)に位置し、創造・発信、国際交流を主目的に、フェスティバルにて先鋭的な作品を紹介することや国際交流の拠点をつくる役割を持つ傾向がある。映画のフェスティバルは、エリア1(「創造・発信」「国際交流基盤形成」「継承・普及」)とエリア2(「創造・発信」「国際交流基盤形成」)に位置し、国内外から同時代の優れた作品を取り上げてより広い観客に紹介することや、興行面での国内外へのアピールをする役割を持つ傾向がある。

図表5 3つの指標と芸術分野別フェスティバル



なお、上記のマッピングは、各フェスティバル事業の目的や概要から特徴的な要素を整理したものであるが、関連プログラム等で該当していない指標部分について補完している場合がある。例えば、フェスティバル/トーキョーは「創造・発信」と「国際交流基盤形成」を事業の中核とするが、観客の拡大のための関連プログラムにも取り組んでいる。また、美術系のフェスティバルでは、別途レ

ジデンス事業を展開し、国際交流基盤形成に努めているケースもある。

事業予算や観客動員数等の事業規模も異なるため、各フェスティバルを一括りに比較することは容易ではないが、各芸術分野で、現状では積極的に取り組みが行われていない領域について、今後、重点的に推進するべき方策を考えることができるだろう。

2)分析2:文化事業の方針と評価の視点の多様性

分析1では、東京都の文化事業の方針から「創造・発信」「国際交流基盤形成」「継承・普及」の3つの指標を抽出しマッピングしたが、分析2では、主要フェスティバルの評価の視点の一部を「創造・発信」「国際交流基盤形成」「継承・普及」の3つの指標に整理した。

主要フェスティバルの評価の視点を、3つの指標に分類すると以下のように分類できる。一つの視点がいくつかの指標に当てはまる場合がある。例えば、先鋭性／一般性をプログラムの構成から考えた場合、「創造・発信」では先鋭性の高いプログラムを、「継承・普及」では一般性の高いプログラム、また、「国際交流基盤形成」では、海外からの先鋭性の高いプログラムまたは海外からの一般性の高いプログラムというように、多面的な解釈が可能なのである。また、プログラムの構成は事業の結果であるが、それが観客に与えた影響やアーティストに与えた影響、芸術界に与えた影響などの成果や波及効果を測定する場合、さらなる評価基準を開発する必要がある。それらの視点から読み解くことのできる成果や波及効果が複合的であることを示す。

また、3つの指標に該当しない視点は、別の枠組みに位置づけた。これらの視点は、事業の仕組みを表す評価の視点が多く、また、今後、3つの指標に該当しない評価の視点を開発する場合には、例えば、地域振興、観光や産業分野との連携等を視野に入れることも可能である。

図表6 東京都の文化事業の方針と評価の視点の多様性

創造・発信	継承・普及	国際交流・基盤形成
国内性／国際性 アジア／欧米 地域性（東京性）／広域性 横断的／ジャンル限定 問題提起／作品鑑賞 テーマ性あり／テーマ性なし 価値創造的／価値共有的 他者性／自己同一性 先鋭性／一般性 発展的／一回的 若手作家／ベテラン作家 人材発掘／実績重視 公募枠あり／公募枠なし コアなファン／マス 双方向的／方方向的	国内性／国際性 アジア／欧米 地域性（東京性）／広域性 横断的／ジャンル限定 開放性／閉鎖性 問題提起／作品鑑賞 テーマ性あり／テーマ性なし 価値創造的／価値共有的 他者性／自己同一性 先鋭性／一般性 発展的／一回的 若手作家／ベテラン作家 人材発掘／実績重視 コアなファン／マス 若い観客／ 若手 の観客 観客参加あり／観客参加なし 双方向的／方方向的	アジア／欧米 横断的／ジャンル限定 開放性／閉鎖性 先鋭性／一般性 双方向的／方方向的 人材育成／成果発表
上記の枠組みには当てはまらない評価の視点		
有料／無料、エリア集中／地域拡散、都市型／郊外型、自治体主催／民間主催 アマチュアとの連携あり／なし、ディレクター制／選考委員制、専門的スタッフ／ボランティアの活用		

参考：今後の調査の考え方

本調査研究は既存資料等の収集と整理、分析を中心とし、また調査研究期間の時間的な制約もあったため、評価の視点を抽出することができたが、評価指標の確立までは至らなかった。

そこで、本調査研究で考案した評価の視点を再整理することや、現地調査やインタビュー、アンケート等の方法で一次データを収集し、それらのデータを分析した上で評価指標の確立を必要がある。特に、公開されている資料からは収集することが容易ではなかった事業の設立背景や設立年、事業規模(予算)等は、各事業を比較する上で重要な要素になると思われる。以下に、今後の調査の可能性を整理した。

1) 評価の視点の再整理と試行

本調査研究では、100以上の評価の視点を抽出した。各評価の視点は、一つの視点の持つ意味を明確にするために二分化した項目を対立させた。その結果、一つの視点の反対にある項目が必ずしも正負の意味を持つのではなく、二つの差異や対立の意義を求めることができた。

また、東京都の文化事業の方針の分析から抽出した3つの指標にそれらの評価の視点を分類したが、それぞれの視点の多義的な意味合いから、これ以外にも、該当するもの、新しい指標を設定することができる。また、100以上の評価の視点は、全て異なるものではなく、近い意味を持つものもあるため、例えば、3つの指標内での再分類や、グループ化することも考えられる。

2) フェスティバルの長期的な成果と波及効果

東京都の事業評価では、単年度評価が中心で、各事業の内在的な価値についての記述が中心であったため、フェスティバルの継続的な取り組みや長期的な成果や波及効果が把握しにくかった。長期的な成果は、フェスティバル事業のステークホルダー(利害関係者)を分類し、それぞれの成果と波及効果を測定することが必要となってくる。例えば、国内外の観客、アーティスト、関係者への影響力、また、波及効果として、コミュニティや社会への影響力などで、以下に分類することができる。

- 成果Ⅰ： 国内の観客、アーティスト、関係者
- 成果Ⅱ： 海外の観客、アーティスト、関係者
- 波及効果： コミュニティや社会

3) 定性データの収集と分析

上記で言及した長期的な成果や波及効果については、観客の数や参加アーティストの数などの定量データだけでは十分にその成果を検証することができない。そのため、各ターゲットの変化(例：観客の意識の変化や都市のイメージの変化等)を測定する評価基準と、それらを裏付ける定量データや定性データの収集が必要となってくる。

4) 海外のフェスティバル調査との比較

国内ではフェスティバル事業の評価基準を開発するための調査研究の事例が少ないため、海外の調査研究の事例から調査手法を設計することや、演繹的な方法で評価基準の前提条件を導くことも考えられる。

海外の調査研究で代表的なものは、エジンバラ国際フェスティバル協会のエジンバラ・フェスティバル評価研究(Edinburgh Festivals Impact Study、調査主体：エジンバラ国際フェスティバル協会、

委託機関BOPコンサルティング)や、リバプール市の欧州文化首都のリバプールの経験(Creating an Impact: Liverpool's experience as European Capital Culture、調査主体:リバプール市、委託機関:リバプール大学)などがある。

エジンバラ・フェスティバル評価研究では、世界三大演劇祭の一つとして有名なエジンバラ国際フェスティバル、エジンバラ・フェスティバル・フリンジを含む12のフェスティバルを対象に、文化的、社会的、経済的、メディア的、環境的効果の幅広い視点を取り入れた成果や波及効果が測定された。また、リバプール市の欧州文化首都の調査では、2008年に開催された欧州文化首都が与えた成果や波及効果を、文化的、社会的、経済的、環境的効果の視点から準備段階から開催後までの約5年間の経過を測定している。

ただし、海外の調査研究の事例では、必ずしも英語で書かれた文献を入手することはできず、国や地域に偏りがある。また、海外のフェスティバル事業では国や地域の歴史、社会的背景、文化芸術の環境、事業規模なども異なるため、日本や東京の歴史や社会的背景、文化芸術の環境を考慮して調査をする必要がある。